

令和7年10月24日



守山市 記者提供 資料

担当部署 教育委員会文化財保護課

担当者 大東 悟

電話 077-582-1156

FAX 077-582-9441

調査担当 埋蔵文化財センター

畠本 政美

077-585-4397

もくせいいたもの いわみがたもくせいひん

木製樹物（石見型木製品）がみつかった！

※情報解禁日 10月30日(木) 17時00分

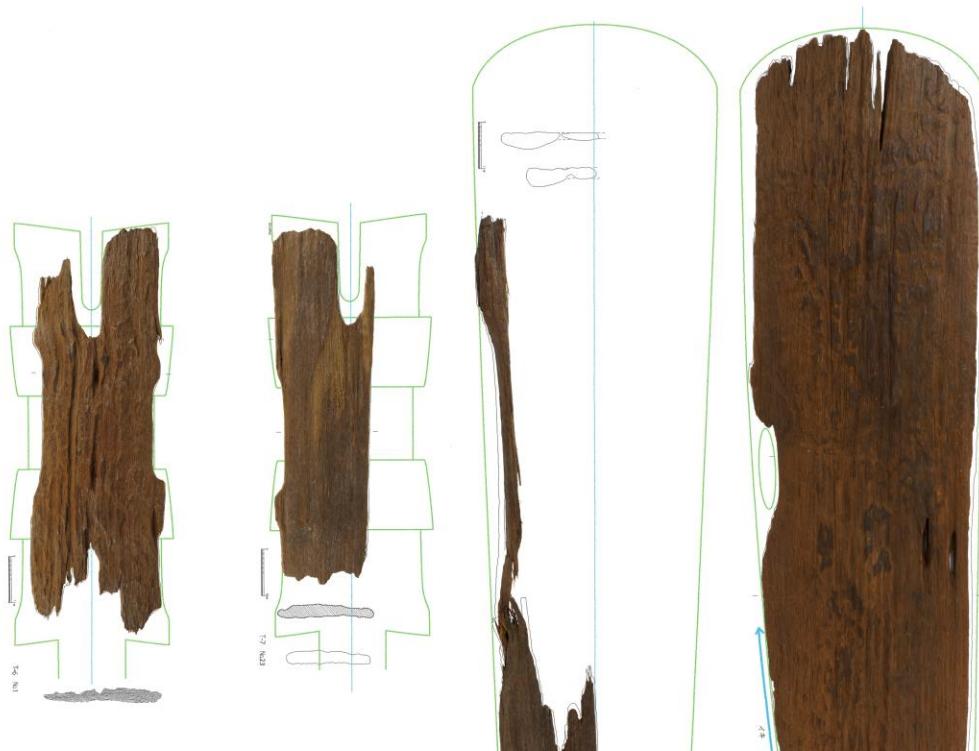
昨年度発掘調査を実施した阿比留遺跡から、古墳跡を検出しました。ひとつの古墳跡の周濠の中からは、古墳に立てられていた盾形木製品や石見型木製品、笠形木製品が出土しました。とくに石見型木製品は、全国で18例目、滋賀県内でも4例目となる数少ない大変貴重な遺物です。

今回保存処理も終わり、展示も可能となりましたことから、もう一つの古墳跡から出した人物埴輪や動物埴輪などとともに、阿比留遺跡の成果報告として展示をいたします。

- 展示テーマ 「阿比留遺跡からみつかった木製樹物と埴輪」
- 期間 令和7年11月1日（土）～30日（日）
(期間中、火曜日、祝日の翌日は休館です)
- 開館時間 午前9時から午後4時まで
- 場所 守山市立埋蔵文化財センター 1階 ホール
- 展示品 石見型木製品、盾形木製品、人物埴輪、動物埴輪、円筒埴輪、壺など
- 情報解禁日 10月30日(木) 17時00分



木製樹物出土状況写真



石見型木製品

盾形木製品

笠形木製品

保存処理をした木製樹物

阿比留遺跡出土 保存処理木製樹物大きさ一覧

番号	大きさ (cm)			樹種	備考
	長さ	幅	厚み		
1	95.0	17.2	2.5	コウヤマキ	石見型木製品
2	75.0	21.0	3.0	コウヤマキ	石見型木製品
3	111.5	11.0	1.8	コウヤマキ	石見型木製品
4	87.2	29	3.0	コウヤマキ	石見型木製品
5	48.0	5.0	1.3	コウヤマキ	石見型木製品
6	219.0	22.0	3.5	コウヤマキ	盾形木製品
7	263.0	49.0	3.0	コウヤマキ	盾形木製品
8	径 26.5 × 30		高 7.2	コウヤマキ	笠形木製品

コメント

奈良県立橿原考古学研究所
鈴木調査部長

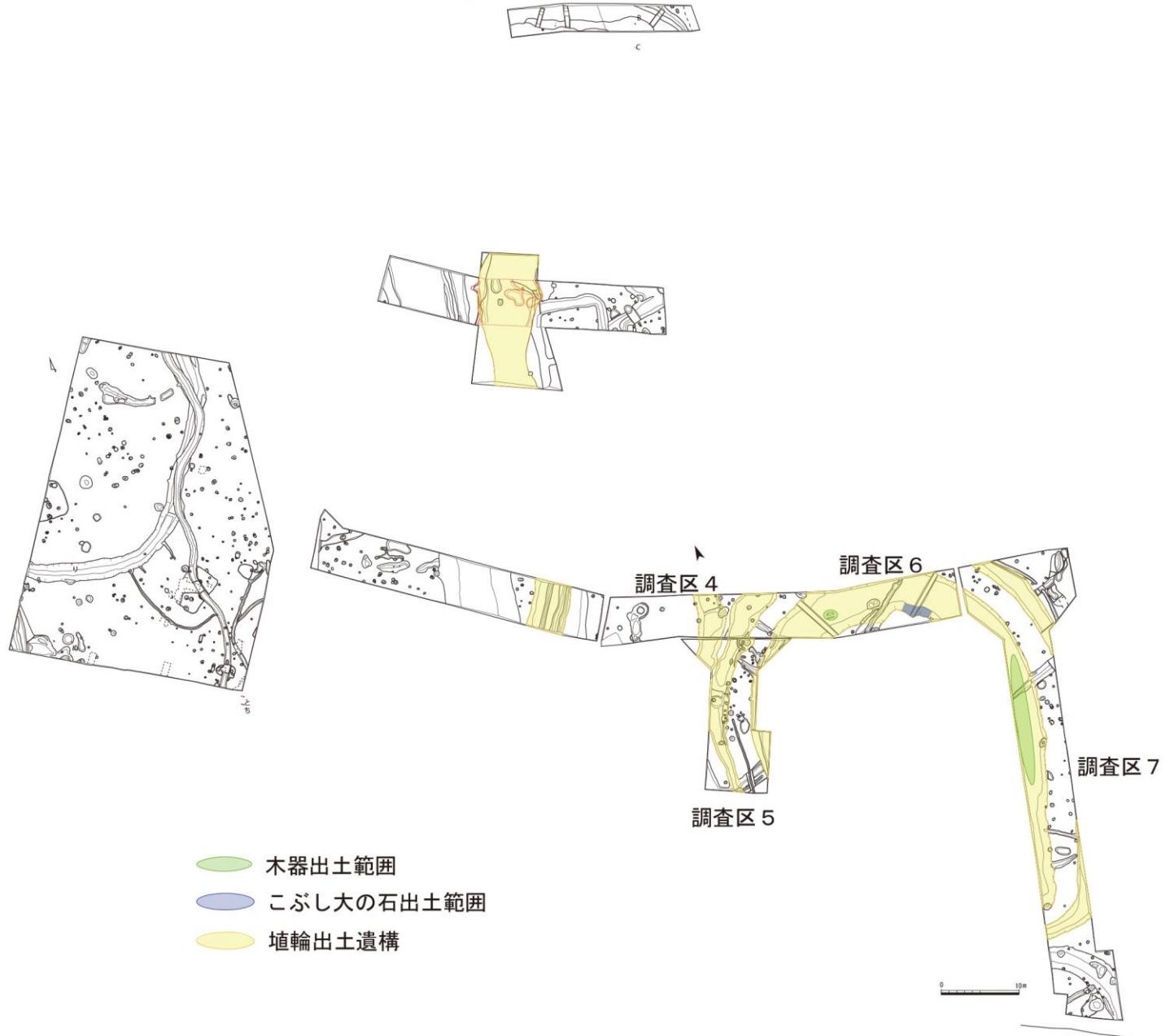
阿比留遺跡出土木製樹物の観察所見

阿比留遺跡出土木製樹物の特徴

- 出土した木製樹物は、石見型木製品 5 点（内 4 点が保存処理済み、コウヤマキ製）、盾形木製品 2 点（コウヤマキ製）、笠形木製品 1 点（コウヤマキ製）の 3 器種。
- 3 器種の木製樹物が出土しているのは、滋賀県では、狭間遺跡 1 号墳の笠形木製品 1 点、石見型木製品 2 点、鳥形木製品 2 点の 3 器種とこの阿比留遺跡例だけ。
- 6 世紀初頭～前半にみられる木製樹物の特徴を備えている。
- 盾形木製品は滋賀県で初めての出土事例で、長大な盾面を備えているということが特徴的。
- 滋賀県においては、出現段階の 5 世紀前半～中頃の椿山古墳（笠形 6 点）以降、木製樹物出土古墳が、5 世紀後半～6 世紀前半に継続的に存在。5 世紀後半の草津市狭間遺跡 1 号墳（笠形 6 点、石見型 2 点、鳥形 1 点）、5 世紀末～6 世紀初頭の栗東市狐塚 3 号墳（笠形 24 点、鳥形 1 点）、同時期には野洲市林ノ腰古墳（笠形 1 点、石見型 4 点）、守山市服部遺跡 19 号墳（石見型 1 点）がある。

6 世紀前半には米原市狐塚 5 号墳（鳥形 1 点）と彦根市塚乞手古墳（笠形 1 点、鳥形 1 点）がある。5 世紀前半～6 世紀前半まで継続して木製樹物出土古墳が確認される奈良県に次いで、滋賀県は木製樹物出土古墳の事例が継続する地域と評価でき、そのなかに今回の阿比留遺跡例も位置付けられる。





阿比留遺跡発掘調査全体遺構図

木製樹物樹立古墳の性格

- ・木製樹物出土古墳は、日本列島では奈良、大阪、滋賀、京都、兵庫、愛知、福岡に分布し、韓国西南部榮山江流域の前方後円墳にも木製樹物がみられる。現状では 44 基の古墳から 600 点以上の木製樹物が出土（阿比留遺跡例含む）。
- ・このうちコウヤマキと樹種同定された木製樹物が出土している古墳は 35 基あり（阿比留遺跡例含む）、いずれも近畿圏内の古墳出土で、そこから約 500 点のコウヤマキ製木製樹物が確認されている。そのうち大阪府と奈良県の古墳から 400 点以上出土している（次に多いのが滋賀県の 53 点、阿比留遺跡例含む）。
- ・古墳時代における木棺にはじまるコウヤマキの大量消費活動は、王権中枢によって占有的に行われており、その消費は古墳造営に関わるもので、古墳専用材の趣が強い（コウヤマキ製品は集落遺跡からはほとんど出土しない）。
- ・コウヤマキを用材とした木製樹物は 5 世紀初頭頃に出現するとみており、誉田御廟山古墳や土師ニサンザイ古墳の王陵級の古墳から古い段階のものが出土しているので、5 世紀初頭から中頃までは木製樹物が百舌鳥・古市古墳群で生み出され展開し、王権中枢との強い結びつきの表示として、畿内およびその周辺の限定的な古墳に樹立されたとみられる。
- ・5 世紀後半からは、大和（奈良県）を中心として近江（滋賀県）など限定的に木製樹物をもつ古墳の新たな展開がはじまると考えられ、大和では、交通の要衝にある古墳に樹立される傾向、この段階の奈良盆地各所の最大級の古墳や王権の直轄地と目される古墳に樹立されている状況が指摘できる。王権中枢との強い関りを示す器物であるという出現段階からの性格を変えずに古墳に樹立されたとみている。近江においてもこの傾向は同様と考えており、阿比留遺跡例を含む木製樹物を樹立した古墳が示すものは、交通の要衝の地において王権中枢との関係性の強さの誇示ではなかったかと推測する。